様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３６４８

研究課題名（和文）近世村落社会における複合生業の存在と市場経済の発展

研究課題名（英文）The exist of various livelihood and maket economy development in early modern rural society

研究代表者
山内　太（YAMAUCHI, Futoshi）

京都産業大学・経済学部・教授

研究者番号：７０２７１８５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,300,000円

研究成果の概要（和文）：　越後国西蒲原郡の低湿地地域の人々は、水管理が難しい厳しい自然環境の下で、農業、なかんずく稲作は不利な状況にあった。したがって従来はこの地域は農業・稲作が満足に行えず、貧しい地域であったというのが一般的な見方であった。しかし本研究課題によって、人々は、稲作が不利な中で、逆に麦作をはじめとする様々な畑作物、さらには漁業や商業、手工業に積極的に関与し、様々な生業を組み合わせて、生計を立てていたことが明らかとなった。
　しかも人々は、単に自給的生業にとどまらず、織物業をはじめとする様々な市場的活動に積極的に参画し、それによって生計を立てていたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近年民俗学研究や歴史学研究において、稲作生産を相対化すると共に、多様な生業の存在に着目する複合生業論が盛んに行われるようになっている。他方で日本経済史研究では、すでに近世社会が経済社会化していたということは、衆目の一致するところとなっている。そんな中で本研究課題は、複合生業と共に市場経済化にも着目し、市場的活動としての生業の存在をクローズアップした。市場経済化を梃に多様な生業が展開されていたこと。言い換えると、地域社会、村落社会における多様な生業の展開が、ひいては村落社会への市場経済化をもたらしたのだということを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The agriculture, especially rice faming, was a disadvantage to the people in the low marsh region of Nishigamabara-county in Echigo because of the severe natural environment where water management was difficult. Therefore, it was a general view that it was a poor region because the agriculture and the rice farming were not able to go satisfactory. However, this study revealed that people were actively engaged in the production of various field crops, including wheat farming, fishing, commerce, and handicrafts, while rice farming was at a disadvantage. The people were making a living by combining various livelihoods.
　Moreover, it became clear that the people were actively participating in not only self-sufficient, but also various market activities, including the textile industry.

研究分野：日本経済史

キーワード：複合生業　市場経済　自然環境　村落的共同性　近世村落社会　農事暦

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究組織はこれまで、その自然環境制約性と市場経済化のもとで、独自の土地所有・利用構造が形成されていたことを明らかにしてきた。古い、共同体的土地所有の典型例と考えられていた割地についても、西蒲原郡中郷屋村を事例として、その地域独自の自然環境や支配・統治構造、そして市場経済化や生業構造に規定されて存在していたことを明らかにした。他方割地を行うような、一見貧しい稲作単作地域にあっても、自給的生業も含めた多様な生業が存在し、豊かな産物が生み出され、市場経済化が進展していた。つまり割地のような土地制度も、地域の経済構造、生業構造の存在に支えられて初めて存在しえていたことを明らかにしてきた。それゆえ本研究組織は、各地域における支配・統治構造、自然環境を確認した上で、その地域の人々が作り出した社会的制度を支えていたともいえる、経済活動・経済生活（生業）の全体像を明らかしたいと考えるようになった。

民俗学研究においては既に、複合生業論という注目すべき視点が唱えられていた。それは、個人や世帯を中心に、稲作、畑作、漁労、狩猟等々、いくつもの生業・生業技術を組み合わせて成り立っていた人々の生計維持方法を、総体的に明らかにするものである。そこでは、従来の稲作農民や漁民という、あたかも人々が単一の生業によって生活しているかのようなレッテル張りを否定し、また農村、漁村、山村という村落類型自体を疑問視する方向にあった。近世村落社会にあっても人々は、自然環境の規定性を受け、各地域独自の様々な生業を複数組み合わせた複合生業によって生活していたことが指摘されるようになっていた。確かに 18 世紀後半以降市場経済化が進み、村落社会は、多かれ少なかれその影響を受けるようになる。その中で市場経済的生業を中心に、稲作農村、漁村、山村、養蚕村といった分業化、専業化が進んだように見えていた。しかしその中心的産業の背後には、その他の様々な生業が存在し、それらが中心的生業を支え、その営みを可能としていたのではないかと、我々は考えたのである。ところが経済史研究では、従来から小農家族・世帯内分業や副業の重要性は指摘されてきたが、その関心はどうしても、中心的生業、専業的生業、市場経済的生業のみに向けられる傾向にあった。

そこで本研究では、経済史研究が主として取り上げてきた、商いや雇用労働、商品生産・販売といった市場経済的生業の発展を可能とし、市場経済の発展を支えていた、自給的生業を含む複合生業の全体像を確認し、そして市場経済活動を地域の人々の生活サイクルの中に位置づけ直すことで、人々の生活の視点から、市場経済の発展を明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、地域的な自然環境条件と市場経済化の諸条件の中で、徳川時代の村人たちが、生きるために行っていた様々な経済活動を複合生業という視点で捉え直し、彼らの活動の全体像を、モノグラフィックな調査・分析を通して実証的に明らかにすることであった。

調査対象として新潟県西蒲原郡の村落社会を取り上げ、その調査対象地について、まず地域的な自然環境条件及び市場経済化の諸条件と関連しながら、人々がどのような複合生業を形成していたのか。そしてその複合生業は、時代を経るごとに、どのように変化していったのか。この二点を明らかにすることを通して、西蒲原地域における複合生業構造の特徴とその変化を明らかにすることを目的としていた。

同時に地域的な自然環境条件も市場経済化の諸条件も大きく異なる、信州上田藩上塩尻村の事例と比較することで、生業構造の地域的性格に留まらない、近世村落社会共通の複合生業の一般的性格をも明らかにすることも、第二の目的であった。

３．研究の方法

本研究は、調査対象村落における自然環境や様々な生業活動に関する資料調査・収集、さらにデーターベース作成、分析作業を行うという、モノグラフィックな実証研究として、きわめてオーソドックスな手法を用いた。調査対象地域村落に存在する家譜、日記、備忘録、大福帳等の経営資料やその他の個別家文書、近世期の村文書（村明細帳等）や近代初期の地誌（『皇国地誌』等）、郷土誌、調査報告書、現地インタビュー調査によって情報を収集した。同時に情報獲得手段として現在の経済史研究ではあまり重視されなくなった現地実態調査を精力的に行い、文書資料のみならず、現地の人々の経験、言い伝えや昔話、伝説、古い習慣、民俗、古道具、遺物等を積極的に活用した。

また古地図や古い写真、航空写真、地形・地質調査、さらには GIS を用いながら地域・村落の自然環境を再現し、そこに上記手法によって獲得した情報をインプットしようとした。その他、エクスカーションによる自然環境の特徴やその変質に関する実地検分も行った。その結果、自然環境に関する本研究組織内における理解が深まり、共通認識を持つことができ、それぞれの担当分野を考察するにあたって、その情報を加味することが可能となった。

４．研究成果

本研究は調査対象地域である西蒲原郡を、海や河川、潟といった水辺空間に位置する地域と捉えなおし、その視点から自然環境に新たに着目することで、以下のような成果を確認することができた。

（1）多様な生業の存在

これまでの研究でも一定指摘されてきたことではあるが、本研究課題が調査対象地とした新

潟県旧西蒲原郡を中心とする地域において、19 世紀に、極めて多様な生業が営まれていたことが改めて明らかになった。水辺空間にあり、特に内陸部は水害常襲地ともいえる低湿地帯であるこの地域では、稲作生産は極めて不安定であった。しかも湿田・深田も多く、生産性も低く、また農作業には過重な労働負荷がかかる地域でもあった。しかし年貢を米で負担しなければならない関係上、この地域にあっても稲作生産は重要視されざるを得なかった。そこで人々は、生きるために、米生産以外にも畑作や漁業、工業、商業等様々な生業を行い、生活を営んでいた。

このことについて、まずこの地域に残された「年貢割附状」から検討してみた。それによると、この地域の多くの村々において、様々な生業が行われていたことが確認できた。低湿地域である内陸部においては、潟や川等で盛んにおこなわれていた漁業に対する年貢や、そこに集う鳥を狙う狩猟に対する年貢、さらに人々の日常生活を支える鍛冶屋、桶屋、大工に対する年貢等も存在した。加えて、後述するこの地域の主要な産業である木綿織物に関連する紺屋に対する年貢も、各村々に賦課されていた。その他各村々には、酒を売る人々も存在しており、それらの酒販売人に対する年貢もあった。酒販売人が各村々に存在していたということは、それを成り立たせる購買者・需要の存在を想像させる。この地域の村々には、意外と、様々な生業を行う人々が存在したし、またそれらを求める人々、それらを成り立たせる需要が存在していたということである。また海岸沿い濱方の村々においても、漁猟運上は当然としても、鳥役や大工役、鍛冶役さらには塩役等が付加されている。こちらにおいても、やはり多様な生業が営まれていたことが年貢資料からも窺えた。

次に、この多様な生業の存在を、各村々に残された「村明細帳」という資料から確認してみた。その資料には、男女作間稼ぎが記載されているのだが、その中で特に女の作間稼ぎとして、布木綿を生産していたことを記録している村々が多かった。その他潟淵の村々では、鳥猟、漁業や鳥狩猟、蓮根・菱取等もあげられている。これらは自給用のみならず、販売もされていたようである。また海岸沿いの村々においては、当然男は漁撈に従事し、また女は内陸部へ販売に出かけたとしている。他にも男は大工や木挽屋根葺等の日雇いに出、女は塩懸を行うという記述もあった。

ちなみに 1864 年に出版された『越後土産』という地誌に記載されたこの地域の特産物をあげると、棉やその加工品である木綿織物、煙草、菱、眼菜、大根という農産物のみならず、坂鳥、八つ目、シジミ、鯉、鮒、干鰯等の魚類とその加工品、さらに三条や燕では、金物、釘、銅物等の工産品もあげられていた。実に様々な特産物があげられており、この地域の多様な生業の存在を思い知らされる。

続いて、この地域の村々について記述した『皇国地誌』の記述を検討してみよう。「皇国地誌」は明治初期に未完に終わった官選地誌編纂事業であった。刊行されなかったが、調査原稿は各地に残存している。今回利用している資料も、新潟県に残されたその一部である。それによると、この地域の村々における最大の移出生産物は、やはり米であった。記録が残る西蒲原郡の 47 か村中、36 か村は、移出品が米のみ、あるいは他の物産の移出高を全て足しても、米移出額に及ばなかった。しかしながら 11 か村では、米以外の産物が、主要な移出品となっていた。その産物は、木綿、藍、菜種、大豆、小豆、小麦、麻、その他牛蒡や大根等野菜であった。例えば鎧潟縁の村である、葉萱場村では、移出産物として米の記載は無く、最大の移出産物は菜種であり、次いで葉藍であった。また同じく鎧潟縁の村である天竺堂村では、やはり米はなく、最大の産物は大豆であり、次いで実綿であった。その隣村槇島村は、確かに米が最大の移出品ではあったが、ほぼそれに匹敵するぐらい大豆を移出し、その他の木綿、藍、菜種等の移出高を足せば、米の移出高を凌駕していた。

他方米移出額が多い村々においても、例えば津雲田村のように、「農業を専らとす側はら商いをなすもの二戸」というような記載がある村々が多く、工業や商業を兼業あるいは専業としている者が、一定数存在していたことが分かった。

最後に、中郷屋村庄屋笛木家の資料から、この地域の庄屋階層の百姓たちの販売作物を確認してみよう（「文政五年　永用日記帳　作物取扱」笛木家文書）。同家は、同年、多くの米を販売し、多額の貨幣を獲得していたが、それだけに止まらず、菜種、藍、蒟蒻、さらには大豆・小豆・ゴマ、麦といった農作物をも販売していた。

このように、水害常襲地帯であり、稲作生産が不利な地域であった西蒲原郡の村々では、稲作以外の様々な農作物・海産物、工産物が販売されていた。特に木綿織生産がこの地域では非常に大きな産業として存在しており、これに関連する木綿生産、藍生産などが盛んであったことが注目される。農業のかたわら綿織物生産に携わる女性がたくさん存在していたこと、あるいはその他の手工業や商業、漁業等に携わる人々も多数存在していたことが、明らかになった。

(2)　農業生産暦等について

このように市場経済化が進展していたこの地域における、農業生産の姿をもう少し詳しく確認してみよう。この地域の稲作の作付け品種は、主として晩稲を中心とした品種であった。そしてこの晩稲の品種は、コメの品種としては良いものではなかったという。

農作業としては、新暦に換算して、だいたい 4 月下旬から 5 月上旬に、苗代に種を蒔き、5 月下旬から 6 月上旬に田植えを行っていた。遅い村では、5 月下旬に種を蒔き、6 月下旬に田植えをする村もあった。そして 10 月下旬から 11 月上旬にかけて、刈り取りを行った。

畑作物はというと、中ノ口川沿に位置していた、村上藩領味方村では、主に大豆、麦を作っていたという。その他粟、黍、稗、胡麻、小豆、菜、大根、麻、里芋、茶、木綿を作っていたとい

う（明治三年「諸色書上帳」笹川家文書）。粟や黍、稗などは自給用であったかもしれないが、上記笛木家の事例から考えると、その他の大豆や麦、小豆以下、商品として販売していた可能性が高いのではないか。また田潟の傍に位置した同じく村上藩領の木場村では、味方村と同じような畑作物を生産していたが、その他に蕎麦という記載もあった（慶応四年「諸色書上帳」山際家文書）。

他方、長岡藩領吉田組の村々における畑生産を、安政六年の大風による被害報告から確認してみると、各村々における夏季の主要な畑作物は、村ごとにその割合に大きな違いはあるが、木綿と大豆が主要な畑作物として存在していた。その他にも、木綿織物の染色に用いる藍や茶、蔬菜等があげられていた（安政四年「御用留」笛木家文書）。

ところで 1830 年に新発田藩の農業調査の一環として、小泉善之助、高橋九之助、大野太郎蔵の三人を農業取調べ方として記された、『北越新発田領農業年中行事』という農書によると、西蒲原郡の南側に位置する中之島地域（南蒲原郡）において、少なくとも 54 種類の作物が畑で栽培されていたという。そしてそれらは、4 月から 5 月に種まきを行い、7 月から 8 月に収穫する、なす、きゅうり、とうがん、かぼちゃ、すいか等の野菜類と、同じ頃に種まきを行い、9 月 10 月に収穫する、粟、稗、大豆、ごま、キビ、モロコシ等の穀類。また 8 月以降に種まきを行い、翌年 6 月以降に収穫する、小麦、大麦、えんどう豆、インゲン豆、菜種等に分けることができた。

西蒲原郡においても、例えば前述中郷屋村庄屋笛木家では、明治二年に、新暦 6 月 3 日から 6 日に田植えを行ったのち、翌 7 日には続いて菜種を刈取り、さらに 6 月 9 日には藍を植えている（明治二年「日記」笛木家文書）。

ただしこの地域では、他の地域では既に見られた、水田二毛作は行われていなかったようである。従って低湿地が広がる西蒲原郡内陸部の村々においては、限られた畑地に、大麦、小麦をも含む多様な畑作物を生産するための、極めて効率的な畑地利用がなされていたと考えられる。例えば前述『農業年中行事』によると、7 月下旬に麻を刈り取った跡地へ、8 月上旬に蕎麦の種を蒔き、10 月上旬に収穫している。同じく麻を刈り取った跡地に、蕪を植える場合もあったという。さらに耕地の同時利用、間作も行われている。荏胡麻や綿を収穫した跡に、小麦を蒔き、翌年の夏至の頃に収穫した。その収穫前、立夏頃、麦畑に棉の種を蒔いている。この綿畑に大根を間作すると、格別に出来が良いとしている。また大豆は、5 月上旬、麦の畝の両側に植え付けるとしている。麦を刈り取ったあと、中耕して麦の根を抜き取り、麦の畝を崩す。その収穫は早生で 8 月、晩生で 9 月である、としている。

その他菜種は、8 月上旬に、ごま、えごま、里芋などの作物の畝間に蒔き、胡麻や荏胡麻、里芋が 9 月、10 月に収穫された後、翌年 6 月上旬に収穫するとしている。上記中郷屋村の笛木家でも、6 月上旬に菜種を刈り取っており、他の畑作物と輪作、間作を行っていた可能性は高いといえよう。

粟、きび、モロコシは、豆畑、綿畑の所々に植えるとしているし、稗もまた、同じ頃豆畑の畝間の所々に蒔くとしている。救荒用作物として蓄えておく稗は、元来水気を好むので、田の中に畝を作って、そこに蒔きつけて、その後一切手入れをしないというやり方もあった。大豆についても、畦に豆付き棒というものを用いて穴を開け、そこに種を蒔き、栽培するというやり方もあった。

低湿地域であるこの地域において、限られた畑地を最大限利用するための農法が展開されていたといえる。つまり、限られた耕地において、稲作のみならず、商品作物を含む多様な農作物を生産する多様な農業を行っていた。加えて人々は、年間を通して田や水路や川、潟において、鯉、鮒、泥鰌等魚類や、エビなど甲殻類を捕獲していた。さらに潟では、春秋にレンコン掘り、夏には菱取りも行われた。また一部の村では、主に冬期に鴨等を狙う狩猟が行われていた。しかも商工業をも営む人々もいた。まさにこの地域の村むらでは、年間を通して、さまざま生業が行われていた。複合生業が営まれ、それによって生活が成り立っていたのである。

（3）労働移動

次に西蒲原郡海岸部漁村について検討してみたい。ここではまず「他所稼ぎ」といわれる出稼ぎに着目したい。具体的な検討を加えたのは、角田浜村である。同村では、1740 年代から 1860 年代にかけて人口が着実に増加した。この村の継続的な人口増加には、市場経済化の波に対応した農業、製塩、漁業、そして「他所稼ぎ」と呼ばれる労働移動を中心とした、複合生業の存在が関連していたと考えられる。19 世紀前半には同村から、大工や木挽きとして働くため、関東北部に出稼ぎに出ることが、村の男たちの職業スタイルの一つに組み込まれていた。海村である角田浜村では、農業、漁業、製塩等の生業に加えて、出稼ぎによる大工仕事という生業も存在していた。まさに出稼ぎも複合生業の一パターンとして存在していたのである。

この労働移動に関して、注意すべき現象を見出したので、最後にそれについて述べておきたい。大潟傍の黒鳥村の事例である。1820 年に新川が開削されたことにより、黒鳥村にある徳人潟、浦潟が干上がり始めた。そして黒鳥村ではこの開発を村全体で取り組もうとし始めた。しかしあまりにも耕作地を広げすぎたためか、人手不足のため十分な収穫をあげることができなくなった。他方で、同じころ毎年一定数の住民が、村外へ流出していた(以上は、鷲尾家文書より)。確かに水害被害による経営破綻、口減らし、重労働の回避等が考えられるが、いずれにせよ新耕地の開発が、必ずしも住民の定着には繋がらなかったことを示している。地域内に多様な生業が存在し、また地域外への人口移動ルートが形成されていた徳川時代末期の西蒲原郡においては、

過剰労働力を村から輩出していたのではなく、まさに労働力需要が拡大している中で、人口流出が生じていたのである。この点については、注意すべき必要があると考えている。

(4)まとめ

水害常襲地域でもあり、また稲作生産の不安定性、困難性、重労働を抱えた西蒲原郡諸村では、他方でこの自然環境を利用して、市場経済の発展を梃に、多様な生業を行い、生活を営んでいた。このような状況に対し、領主は、繰り返し、そして 19 世紀に入ってもなお、百姓に対し、華美を禁じ、倹約を命じ、そして農業に精励することを要求した。特に、盛んとなった織物業への規制を行いもし、かつ百姓の商業活動を規制しようとした（上記笛木家文書等）。また百姓の休日を調査し、勝手な休日を設けないように命じた(新津組大庄屋桂家文書等)。農業、特に稲作生産に支配の基盤を置く領主からすると、農業以外のことに精を出し、勝手に休みを取り、しかも華美な生活を送ろうとする地域の農民たちの姿は、農業に手を抜き、農業を忌避し、いわば町人のような風俗を真似るものに見えたということであろう。町人風の風俗が農村部にも浸透していたように、支配層は感じていたといえる。そしてそれに対して危機感を抱いていたのであろう。従来の研究では、これらの禁令が、18 世紀以来繰り返し提示されるため、19 世紀に入ってもこういった禁令が出ることを重要視せず、惰性的なもの、建前の表明と捉えてしまっている。しかし 19 世紀においてもこのような禁令が出されているということは、ある意味時代錯誤的であるし、かえって領主の危機意識の表れであるとも言えるだろう。本研究課題の研究成果に基づけば、当時のこの地域の人々には、一定程度、領主が危惧するような傾向を、確かにたどっていたといえるかもしれないからである。

多様な複合生業の展開は、地域への市場経済化をもたらすものであったともいえるし、また逆に市場経済化の一環として複合生業が広がっていったとも言える。自給的な生業も含めて、市場経済化と並行して複合生業が展開していたということである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 山内太　長谷部弘　村山良之
２．発表標題 The livelihood of the people who have been in the wetlands area in early modern Japan
３．学会等名 Rural History 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 張テイテイ
２．発表標題 Structure and Characteristics of Labor Migration in the 19th Century Japan:Historical analysis of ‘Tasho-kasegi’ of Kakuda-hama Village in Echigo Area
３．学会等名 Rural history 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋基泰
２．発表標題 The communal system, families and the ways people there earned a living in a fen-edged parish, Willingham, Cambs., England
３．学会等名 Rural History 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	村山　良之 (MURAYAMA Yosiyuki) (10210072)	山形大学・大学院教育実践研究科・教授 (11501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐藤　康行 (SATO Yasuyuki) (40170790)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	
研究分担者	長谷部　弘 (HASEBE Hiroshi) (50164835)	東北大学・経済学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	張　テイテイ (CHO Teitei) (60803046)	東北大学・経済学研究科・博士研究員 (11301)	
研究分担者	王　慧子 (OU Keiko) (00748965)	東北大学・経済学研究科・博士研究員 (11301)	
研究協力者	高橋　基泰 (TAKAHASIH Motoyasu)		
研究協力者	岩間　剛城 (IWAMA Kouki)		